

森
鷗
外
集

森 鷗外集 (二)

昭和三十一年十月一日 印刷
昭和三十一年十月五日 發行

著 者 森 鷗 外
もり おう ぐわい

發行者 古 田 晁
東京都千代田區神田小川町二ノ八

印刷者 山 田 一 雄
東京都青海市根ヶ布三八五

發行所 筑 摩 書 房
東京都千代田區神田小川町二ノ八

(電話)東京二九局(29) 七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

整 版 株式會社 精 興 社
印 刷 株式會社 精 興 社
製 本 株式會社 精 興 社



0124 70567123

森
鷗
外
集
二

森 鷗外集(二) 目次

即興詩人	五
青 年	一四五
文づかひ	二二七
追 儼	二三五
鶏	二三八
あそび	二五〇
沈黙の塔	二五七
心 中	二六一
不思議な鏡	二六七
羽鳥千尋	二七三
藤 棚	二八〇
大鹽平八郎	二八五

堺事件	三二五
安井夫人	三二六
栗山大膳	三三四
最後の一句	三四五
梶原品	三五二
獨逸日記	三五六
森鷗外のロマンティズム(佐藤春夫)	四二五
解説	四二六

装幀 恩地孝四郎

即興詩人

初版例言

一、即興詩人は捷馬の人 HANS CHRISTIAN ANDERSEN (1805—1875) の作にして、原本の初板は千八百三十四年に世に公にせられぬ。

二、此譯は明治二十五年九月十日稿を起し、三十四年一月十五日完成す。殆ど九星霜を経たり。然れども軍職の身に在るを以て、稿を屬するは、大抵夜間、若くは大祭日曜日にして家に在り客に接せざる際に於てす。予は既に、歳月の久しき、嗜好の屢屢變じ、文致の畫一なり難きを憾み、又筆を擱くことの頻にして、興に乗じて揮蕩すること能はざるを惜みたりき。世或は予其職を曠しくして、縦に述作に耽ると謂ふ。寃も亦甚しきかな。

三、文中加特力教の語多し。印刷成れる後、我國公教會の定譯あるを知りぬ。而れども遂に改刪すること能はず。

四、此書は印するに四號活字を以てせり。予

の母の、年老い目力衰へて、毎に予の著作を讀むことを嗜めるは、此書に字形の大きなを選びし所以の一なり。夫れ字形は大きな。然れども紙面殆ど餘白を留めず、段落猶且連續して書し、以て紙數をして太だ加はらざらしむることを得たり。

明治三十五年七月七日下志津陸營に於いて

譯者識す

第十三版題言

是れ予が壯時の筆に成れる IMPROYSAT OREN の譯本なり。國語と漢文とを調和し、雅言と俚辭とを融合せむと欲せし、放膽にして無謀なる嘗試は、今新に其得失を論ずることを須るざるべし。初めこれを縮刷に付するに臨み、予は大いに字句を削正せむことを期せしに、會々歐洲大戰の起るありて、我國も亦其旋渦中に投ずるに至りぬ。羽檄旁午の間、予は僅に假刷紙を一閱することを得しのみ。

大正三年八月三十一日觀瀾樓に於いて

譯者又識す

わが最初の境界

羅馬に往きしことある人はピアツツア、パルベリイニを知りたるべし。こは貝殻持てるトリイトンの神の像に造り做したる、美しき噴井ある、大なる廣こうちの名なり。貝殻よりは水湧

き出で、その高さ數尺に及び。羅馬に往きしことなき人もかの廣こうちのさまをば銅板畫にて見つることあらむ。かゝる畫にはピア、フエリチエの角なる家の見えぬこそ恨なれ。わがいふ家の石垣よりのぞきたる三條の樋の口は水を吐きて石盤に入らしむ。この家はわがためには尋常ならぬおもしろ味あり。そをいかにといふにわれはこの家にて生れぬ。首を回してわが碑かりける程の事をおもへば、目もくるめくばかりいろ／＼なる記念の多きことよ。我はいづこより語り始めむかと心迷ひて爲むすべを知らず。又我世の傳奇の全局を見わたせば、われはいよいよこれを寫す手段に苦めり。いかなる事をか緊要ならずとして棄て置くべき。いかなる事をか全畫圖をおもひ浮べしめむために殊更に數へ舉ぐべき。わがためには面白きことも外人のためには何の興もなきものあらむ。われは我世のおほいなる釋物語をありのまゝに偽り飾ることなくして語らむとす。されどわれは人の意を迎へて自ら喜ぶ性のこゝにもまぎれ入らむことを恐る。この性は早くもわが穢き時に、蟲の中なる雜草の如く萌え出で、やうやく聖經に見える一株の芥子の如く高く空に向ひて長じ、つひには巢食ひたり。わが最初の記念の一つは既にその芽生を見せたり。おもふにわれは最早六つになりし時の事なる。われはおのれより穢き子供二三人と向ひなる尖帽僧の寺の前にて遊びき。寺の扉には小き眞鍮の十字架を打ち付けたりき。

その處はおほよそ扉の中段にてわれは僅に手をさし伸べてこれに達することを得き。母上は我を伴ひてかの扉の前を過ぐるごとに、必ずわれを掻き抱きてかの十字架に接吻せしめ給ひき。あるときわれ又子供と遊びたりしに、甚だ穢き一人がいふやう。いかなれば耶蘇の禪子は一たびもこの群に來て、われ等と共に遊ばざるといひき。われさかしく答ふるやう。むべなり、耶蘇の禪子は十字架の下にゆきぬ。かしこには何物も見えざりしかど、われ等は猶母に教へられし如く耶蘇に接吻せむとおもひき。さるを我等が口はかしこに届くべきならねば、我等はかはるがはる抱き上げて接吻せしめき。一人の子のさし上げられて僅に唇を尖らせたるを、抱いたる子力足らねば落しつ。この時母上通りかゝり給へり。この遊のさまを見て立ち住まり、指組みあはせて宜ふやう。汝等はまことの天使なり。さて汝はといひきして、母上はわれに接吻し給ひ、汝はわが天使なりといひ給ひき。

母上は隣家の女子の前にて、わがいかに罪なき子なるかを繰り返して語り給ひぬ。われはこれを聞きしが、この物語はいたくわが心に協ひたり。わが罪なきことは固よりこれがために前には及ばずなりぬ。人の意を迎へて自ら喜ぶ性の種は、この時始めて日光を吸ひ込みたりなり。造化は我におとなしく軟なる心を授けたりき。さるを母上はつねに我がこゝろのおとなしきを我に告げ、わがまことに持てる長處と母上

のわが持てりと思ひ給へる長處とを我にさし示して、小兒の罪なきはかの醜き「バジリスコ」の獸におなじきをおもひ給はざりき。かれもこれもおのが姿を見るときは死なでかなはぬ者なるを。

彼尖帽宗の僧にフラア・マルチノといへるあり。こは母上の懺悔を聞く人なりき。かの僧に母上はわがおとなしきを告げ給ひき。祈のこゝろをばわれ知らざりしかど、祈の詞をばわれ善く讀じて洩らすことなかりき。僧は我をかはゆきものにおもひて、あるとき我に一枚の圖をおくりしことあり。圖の中なる聖母のこぼし給ふおほいなる涙の露は地獄の燄の上におちかかれり。亡者は争ひてかの露の滴りおつるを承けむとせり。僧は又たびわれを伴ひてその僧舎にかへりぬ。當時わが目にとまりしは、方なる形に作りたる圓柱の廊なりき。廊に圍まれたるは小き馬鈴諸圓にて、そこにはいとすぎ(チブレッツオ)の木二株、檸檬の木一株立てりき。開け放ちたる廊には世を遊りし僧どもの像をならべ懸けたり。部屋といふ部屋の戸には獻身者の傳記より撰び出したる畫圖を貼り付けたり。當時わがこの圖を觀し心は、後になりてラファエロ、アンドレア・デル・サルトルが作を觀る心におなじかりき。

僧はそち心猛き童なり、いで死人を見せむといひて、小き戸を開きつ。こゝは廊より二三級低きところなりき。われは延かれて級を降りて見しに、こゝも小き廊にて、四圍悉く髑髏な

りき。髑髏は髑髏と接して壁を成し、壁はその並びざまにて許多の小龕に分れたり。おほいなる龕には頭のみならで、胴をも手足をも具へたる骨あり。こは高位の僧のみまかりたるなり。かゝる骨には褐色の尖帽を被せて、腹に繩を結び、手には一卷の經文若くは枯れたる花束を持たせたり。餐卓、花形の燭臺、そのほかの飾をば肩胛、脊椎などにて細工したり。人骨の浮彫あり。これのみならず忌まはしくも、又趣なきはこゝの拵へざまの全體なるべし。僧は祈の詞を唱へつゝ行くに、われはひたと寄り添ひて從へり。僧は唱へ畢りていふやう。われも早晚こゝに眠らむ。その時汝はわれを見舞ふべきかといふ。われは一語をも出すこと能はずして、僧と僧のめぐりなる氣味わるきものと驚き胎たり。まことに我が如き禪子をかくるところに伴ひ入りしは、いとおろかなる業なりき。われはかしこにて見しものに心を動かさるゝこと甚しかりければ、歸りて僧の小房に入りしとき纔に生き返りたるやうなりき。この小房の窓には黄金色なる柑子のいと美しきありて、殆ど一間の中に垂れむとす。又聖母の畫あり。その姿は天使に擔ひ上げられて日光明なるところに浮び出でたり。下には聖母の息ひたまひし墓穴ありて、もゝいろちいるの花これを掩ひたり。われはかの柑子を見、この畫を見るに及びて、わづかに我にかへりしなり。

この始めて僧房をたづねし時の事は、久しき間わが空想に好き材料を與へき。今もかの時の

事をおもへば、めづらしくあざやかに目の前に浮び出でむとす。わが當時の心にては、僧といふ者は全く我等の知りたる常の人とは殊なるやうなりき。かの僧が褐色の衣を着たる死人の殆どおのれとおなじきまると共に棲ること、かの僧があまたの尊き人の上を語り、あまたの不思議の蹟を話すこと、かの僧の尊さをば我母のいたく敬ひ給ふことなどを思ひ合する程に、われも人と生れたる甲斐にかゝる人にならばやと折々おもふことありき。

母上は未亡人なりき。活計を立つるには、鍼仕事して得給ふ錢と、むかし我等が住みたりしおほいなる部屋を人に借して得給ふ賃とあるのみなりき。われ等は屋根裏の小部屋に住めり。

かのおほいなる部屋に引き移りたるはフエデリゴといふ年少き畫工なりき。フエデリゴは心敏く世をおもしろく暮らす少年なりき。かれはいともいとも遠きところより來ぬといふ。母上の物語り給ふを聞けば、かれが故郷にては聖母を耶蘇の種子をも知らずとぞ。その國の名をば璉馬といへり。當時われは世の中にいる／＼の國語ありといふことを解せねば、畫工が我が言ふことを曉らぬを耳とはきがためならむとおもひ、おなじ詞を繰り返して聲の限り高くいふに、かれはわれを可笑しきものにおもひて、をりを果をわれに取らせ、又わがために兵卒、馬、家などの形をゑがきあたへしことあり。われは畫工とは幾時も立たぬに中善くなりぬ。われは畫工を愛しき。母上もをり／＼かれは善き人な

りと宣ひき。さるほどにわれはとある夕母上とフラア・マルチノとの話を聞きしが、これを聞きてよりわがかの技藝家の少年の上をおもふ心あやしく動かされぬ。かの異國人は地獄に墜ちて永く浮ぶ瀬あらざるべきかと母上問ひ給ひぬ。そはひとりかの男の上のみにあらざり。異國人のうちにいかの男の如く悪しき事をば一たびもせざるもの多し。かの輩は貧き人に逢ふときは物取らせて吝むことなし。かの輩は債あるときは期を愆たず額をたがへずして拂ふなり。然のみならず、かの輩は吾邦人のうちなる多人數の作る如き罪をば作らざるやうにおもはる。母上の問はおほよそ此の如くなりき。

フラア・マルチノの答へけるやう。さなり。まことにいはるゝ如き事あり。かの輩のうちに善き人少からず。されどおん身は何故に然るかを知り給ふか。見給へ。世中をめぐりありく悪魔は、邪宗の人の所詮おのが手に落つべきを知りたるゆゑ、強ひてこれを誘はむとすることなし。このゆゑに彼輩は何の苦もなく善行をなし、罪惡をのがる。善き加特力教徒はこれと殊にて神の愛子なり、これを陥れむには悪魔はさまざまの手立を用ゐざること能はず。悪魔はわれ等を誘ふなり。われ等は弱きものなればその手の中に落つること多し。されど邪宗の人は肉體にも惡魔にも誘はるゝことなしと答へき。

母上はこれ聞きて復た言ふべきこともあらねば、便なき少年の上をおもひて大息つき給ひぬ。かたへ聞せしわれは泣き出しつ。こはかの

人の永く地獄にありて饑に苦められむつらさをおもひければなり。かの人は善き人なるに、わがために美しき畫をかく人なるに。

わが穢きころ、わがためにおほいなる意味ありと覺えし第三の人はベツボのをぢなりき。惡人ベツボといふも西班牙證の王といふも皆その人の綽號なりき。此王は日ごとに西班牙證の上に御ましましき。(西班牙廣こうぢよりモンテ、ピンチヨオの上なる街に登るには高く廣き石級あり。この石級は羅馬の乞兒の集まるところなり。西班牙廣こうぢより登るところなればかく名づけられしなり。)ベツボのをぢは生れつき兩の足癒えたる人なり。當時そを十字に組みて折り敷き居たり。されど穢きときよりの熟鍊にて、をぢは兩手もて歩くこといと巧なり。其手には革紐を結びて、これに板を掛けたるが、をぢがこの道具にて歩む速きは健かなる脚もて行く人に劣らず。をぢは日ごとに上にもいへるが如く西班牙證の上に坐したり。さりとして外の乞兒の如く憐を乞ふにもあらず。唯だおのが前を過ぐる人あるごとに、詐ありげに面をしかめて「ボン、ジョオルノオ」(我俗の今日はといふ如し)と呼べり。日は既に入りたる後もその呼ぶ詞はかはらざりき。母上はこのをぢを敬ひ給ふことさまでならざりき。あらず。親族にかかるとあるをば心のうちに恥ぢ給へり。されど母上はしばしば我に向ひて、そなたのためなれば、彼につきあひおくとたまひき。餘所の人の此世にありて求むるものをば、かの人筐の底

に藏^{かく}めて持ちたり。若し臨終に、寺に納めだにせずば、そを譲り受くべき人、わが外にはあらぬを、母上は恃^{たも}たたまひき。をぢも我に親むやうなところありしが、我は其側にあることに、まことに喜ばしくおもふこと絶てなかりき。或る時、我はをぢの振舞を見て、心に怖を懷きはじめき。こは、をぢの本性をも見るに足りぬべき事なりき。例の石級の下に老いたる盲^{めくら}の乞^こ兒ありて、往きかふ人の「パヨツコ」(我^{われ}二錢許に當る銅貨)一つ投げ入れむを願ひて、薄葉鐵の小筒をさら／＼と鳴らし居たり。我がをぢは、面にやさしげなる色を見せて、帽を揮り動しなすれど、人々その前をばいたづらに過ぎゆきで、かの盲人の何の會釋もせざるに、錢を與へき。三人かく過ぐるまでは、をぢ傍より見居たりしが、四人めの客かの盲人に小貨幣二つ三つ與へしとき、をぢは毒蛇の身をひねりて行く如く、石級を下りて、盲の乞兒の面を打ちしに、盲の乞兒は錢をも杖をも取りおとしつ。ペツボの叫びけるやう。うぬは盗人なり。我錢を竊む奴なり。立派に廢人といはるべき身にもあらでたゞ目の見えぬを手柄顔に、わが口に入らむとする「パン」を奪ふこそ心得られぬといひき。われはこゝまでは聞きつれど、こゝまでは見てありつれど、この時買ひに出でたる、一「フオリエツタ」(一匁)の酒をひさげて、急ぎて家にかへりぬ。

大祭日には、母につきてをぢが祀^{まつり}にゆきぬ。その折には苞苴^{ほうそ}もてゆくことなるが、そはをぢ

が暗^{くら}なるおほ房の葡萄二つ三つか、さらずば砂糖につけたる林檎などなりき。われはをぢ御と呼びかけて、その手に接吻しき。をぢはあやしげに笑ひて、われに半「パヨツコ」を與へ、果子をな買ひそ、果子は食ひ畢りたるとき、迹かたもなくなるものなれど、この錢はいつまでも貯へらるゝものぞと教へき。

をぢが住めるところは、暗くして見苦しかりき。一間には窓といふものなく、また一間には壁の上の端に、破硝子^{やぶし}を紙もて補ひたる小窓ありき。臥床の用をもなしたる大箱と、衣を藏むる小桶二つとの外には、家具といふものなし。をぢがり往け、といはるゝときは、われ必ず泣きぬ。これも無理ならず。母上はをぢにやさしくせよ、と我にをしへながら、我を嚇^{おそ}さむとおもふときは、必ずをぢを案山子^{あんざんこ}に使ひ給ひき。母上の宣たまひけるやう。かく惡劇^{いあく}せば、好きをぢ御の許にやるべし。さらば汝も證の上に坐して、をぢと共に袖乞するならむ、歌をうたひて「パヨツコ」をめぐるゝを待つならむとのたまふ。われはこの詞を聞きても、あながち恐ることなかりき。母上は我をいつくしみ給ふこと、目の球にも優れるを知りたれば。

な子も、共に動きて、我等が面を見て笑み給ふ如くなりき。われは高く朗なる聲して歌ひしに、人々聞きて善き聲なりといひき。或る時英吉利人の一家族、我歌を聞きて立ちとまり、歌ひ畢るを待ちて、長らしき人われに銀貨一つ與へき。母に語りしに、そなたが聲のめでたき故、とのたまひき。されどこの詞は、その後我祈を妨ぐることに、いかばかりなりしを知らず。それよりは、聖母の前にて歌ふごとに、聖母の上をのみ思ふこと能はずして、必ず我聲の美しきを聞く人やあると思ひ、かく思ひつゝも、聖母のわがあだし心を懷けるを嫉み給はむかとあやぶみ、聖母に向ひて罪を謝し、あはれなる子に慈悲の眸を垂れ給へと願ひき。

わが餘所の子供に出で逢ふは、この夕の祈の時のみなりき。わが世は静けかりき。わが自ら作りたる夢の世に心を潜め、仰ぎ臥して開きたる窓に向ひ、伊太利^{イタリア}の美しき青空を眺め、日の西に傾くとき、紫の光ある雲の黄金色したる地の上に垂れかかりたるをめで、時の遷るを知らざることしば／＼なりき。ある時は、遠くクナリナル(丘の名にて、其上に法皇の宮居あり)と家々の棟^{むね}とを越えて、紅に染まりたる地平線のわたりに、眞黒に浮き出で、見ゆる「ヒニヨロ」の木々の方へ、飛び行かばや、と願ひき。我部屋には、この眺ある窓の外、中庭に向へる窓ありき。我家の中庭は、隣の家の中庭に並びて、いづれもいと狭く、上の方は木の「アルタナ」(物見のやうにしたる屋根)にて鎖^{かぎ}さ

れたり。庭ごとに石にて甃^{つく}みたる井ありしが、家々の壁と井との間をば、人ひとり僅かに通らるゝほどなれば、我は上より覗きて、二つの井の内を見るのみなりき。緑なるほうらいしだ（アヂアンツ）生ひ茂りて、深きところは唯だ黒くのみぞ見えたる。俯してこれを見るたびに、われは地の底を見おろすやうに覺えて、ここにも怪しき境ありとおもひき。かゝるとき、母上は杖の尖^{さき}にて窓硝子^{きようし}を淨め、なんぢ井に墜ちて溺^なれだにせずば、この窓に當りたる木々の枝には、汝が食ふべき果^こおほく熟すべしとのたまひき。

隧道、ちん

我家に宿りたる畫工は、廓外に出づるをり、我を伴ひゆくことありき。畫を作る間は、われかれを妨^{さまた}ぐることなかりき。さて作り畢りたる時、われ釋^{はな}き物語して慰むるに、かれも今はわが國の詞を解して、面白がりたり。われは既に一たび畫工に隨ひて、「クリア、ホスチリア」にゆき、昔游戲の日まで猛獸を押し込めおきて、つねに無幸の俘囚を獅子、「イエナ」獸なんどの餌としたりと聞く、かの暗き洞の深き處まで入りしことあり。洞の裡なる暗き道に、我等を導きてくぐり入り、然ゆる松火を、絶えず石壁に振り當てたる僧、深き池の水の、鏡の如く明にて、目の前には何もなきやうなれば、その足もとまで湛へ寄せたるを知らむには、松火

もて觸れ探らではかなはざるほどなる、いづれもわが空想を激したりき。われは怖をば懷かざりき。それは危しといふことを知らねばなりけり。街のはつる處に、「コリゼエオ」（大觀棚）の頂見えたるとき、われ等はかの洞の方へゆくにや、と畫工に問ひしに、否、あれよりは迥に大なる洞にゆきて、面白きものを見せ、そなたをも景色と俱に寫すべし、と答へき。葡萄園の間を過ぎ、古の混堂の址を圍みたる白き石垣に沿ひて、ひたすら進みゆく程に羅馬の府の外に出でぬ。日はいと烈しかりき。緑の枝を手折りて、車の上に挿し、農夫はその下に眠りたるに、馬は車の片側に吊り下げたる一束の秣^{えさ}を食ひつゝ、ひとり徐に歩みゆけり。やうく女神エジエリ^{エジエリ}の洞にたどり着きて、われ等は朝餐^{あさめし}を食べ、岩間より湧き出づる泉の水に、葡萄酒混ぜて飲みき。洞の裏には、天井にも四方の壁にも、すべて絹、天鵝絨^{てんがじよう}などにて張りたらしむやうに、緑こまやかなる若生ひたり。露けく茂りたる葛の、おほいなる洞門にかゝりたるさまは、カラブリア州の谿間なる葡萄架を見る心地す。洞の前數歩には、その頃いと寂しき一軒の家ありて、「カタコンバ」のうちの一つに造りかけたりき。この家今は潰えて斷礎をのみぞ留めたる。「カタコンバ」は人も知りたる如く、羅馬城とこれに接したる村々とを通ずる隧道^{すうどう}なりしが、半はおのづから壞れ、半は盗人、ぬけうりする人などゝの隠家となるを厭ひて、石もて塞がれたるなり。當時猶存じたるは、聖セバスチヤノ寺の

内なる穹窿の墓穴よりの入口と、わが言へる一軒家よりの入口とのみなりき。さてわれ等は一軒家のうちなる入口より進み入りしが、おもふに最後に此道を通りたるはわれ等二人なりしなるべし。いかんといふに此入口はわれ等が危き目に逢ひたる後、いまだ幾もあらぬに塞がれて、後には寺の内なる入口のみ残りぬ。かしこには今も僧一人居りて、旅人を導きて穴に入らしむ。

深きところには、軟なる土に掘りこみたる道の行き違ひたるあり。その枝の多き、その様の相似たる、おもなる筋を知りたる人も踏み迷ふべきほどなり、われは釋^{はな}きに何ともおもはず。畫工はまた豫め其心して、我を伴ひ入りぬ。先づ蠟燭^{ろうそく}一つ點し、一をば猶衣のかくしの中に貯へおき、一卷の絲の端を入口に結びつけ、さて我手を引き進み入りぬ。忽ち天井低くなりて、われのみ立ちて歩まるゝところあり、忽ち又岐路の出づるところ廣がりて方形をなし、見上ぐるばかりなる穹窿をなしたるあり。われ等は中央に小き石卓を据ゑたる圓堂を過りぬ。こゝは始て基督教に歸依したる人々の、異教の民に逐はるゝごとに、ひそかに集りて神に仕へまつりしところなりとぞ。フエデリゴはこゝにて、この壁中に葬られたる法皇十四人、その外數千の獻身者の事を物語りぬ。われ等は石甕のわれ目に燭火さしつけて、中なる白骨を見き。（こゝの墓には何の飾もなし。拿破里に近き聖ヤヌアリウスの「カタコンバ」には聖像をも文字をも

彫りつけたるあれど、これも技術上の價あるに
あらず。基督教徒の墓には、魚を彫りたり。希
臘文の魚といふ字は「イヒトヌス」なれば、暗
に「イエソウス、クリストス、テオウ、ウイオ
ス、ソオテエル」の文の首字を集めて語をなし
たるなり。此希臘文はこゝに耶蘇基督神子救世
者と云ふ。われ等はこれより入ること二三歩
にして立ち留りぬ。ほぐし來たる絲はこゝにて
盡きたればなり。畫工は絲の端を控鈕の孔に結
びて、蠟燭を拾ひ集めたる小石の間に立て、さ
てそこに蹲りて、鑿道の模様を寫し始めき。わ
れは傍なる石に踞りて合掌し、上の方を仰ぎ視
ゐたり。燭は半ば流れたり。されどさきに貯へ
おきたる新なる蠟燭をば、今取り出してその側
におきたる上、火打道具さへ帶びたれば、消え
なむ折に火を點すべき用意ありしなり。

われはおそろしき暗黒天地に通ずる幾條の道
を望みて、心の中にさまざまの奇怪なる事をお
もひ居たり。この時われ等が周圍には寂として
何の聲も聞えず、唯だ忽ち斷え忽ち續く、物寂
しき岩間の雫の音を聞くのみなりき。われはか
く由なき妄想を懷きてしばしあたりを忘れ居た
るに、ふと心づきて畫工の方を見れば、あな
訝かり、畫工は大きく息つき一つとところを馳せめ
ぐりたり。その間かれは頻に俯して、地上のもの
を捜し索むる如し。かれは又火を新なる蠟燭
に點じて再びあたりをたづねたり。その氣色た
だならず覺えければ、われも立ちあがりて泣き
出しつ。

この時畫工は聲を勵まして、こは何事ぞ、善
き子なれば、そこに坐りぬよ、と云ひしが、又
眉を顰めて地を見たり。われは畫工の手に取り
すがりて、最早登りゆくべし、こゝには居りた
くなし、とむつかりたり。畫工は、そちは善き
子なり、畫かきてや遣らむ、果子をや與へむ、
こゝに錢もあり、といひつゝ、衣のかくしを採
して、財布を取り出し、中なる錢をば、ことごとく我に與へき。我はこれを受くるとき、畫工
の手の水の如く冷になりて、いたく震ひたるに
心づきぬ。我はいよく騒ぎ出し、母を呼びて
ます。泣きぬ。畫工はこの時我肩を掴みて、
劇しくゆすり揺かし、靜にせずば打擲せむ、と
いひしが、急に手巾を引き出して、我腕を縛り
て、しかと其端を取り、さて俯してあまたゝび
我に接吻し、かはゆき子なり、そちも聖母に願
へ、といひき。絲をや失ひ給ひし、と我は叫び
ぬ。今こそ見出さめ、といひ、畫工は又地
上をかいさぐりぬ。

さる程に、地上なりし蠟燭は流れ畢りぬ。手
に持ちたる蠟燭も、かなたこなたを捜し索むる
忙しさに、流るゝこといよく早く、今は手の
際まで燃え來りぬ。畫工の周章は大方ならざり
き。そも無理ならず。若し絲なくして歩を運ば
ば、われ等は次第に深きところに入りて、遂に
活路なきに至らむも計られざればなり。畫工は
再び氣を勵まして探りしが、こたびも絲を得ざ
りしかば、力抜けて地上に坐し、我頸を抱きて
大息つき、あはれる子よ、とつぶやきぬ。わ

れはこの詞を聞きて、最早家に還られざるこ
とぞ、とおもひければ、いたく泣きぬ。畫工にあ
まりに緊しく抱き寄せられて、我が縛られたる
手はいざり落ちて地に達したり。我は覺えず埃
の間に指さし入れしに、例の絲を握り得たり。
こゝにこそ、と我呼びしに、畫工は我手を握り
て、物狂ほしきまでよろこびぬ。あはれ、われ
等二人の命はこの絲にぞ繋ぎ留められける。

われ等の再び外に歩み出でたるときは、日の
暖に照りたる、天の蒼く晴れたる、木々の梢の
うるはしく緑なる、皆常にも増してよろこばし
かりき。フエデリゴは又我に接吻して、衣のか
くしより美しき銀の鍊を取り出し、これをば汝
に取らせむ、といひて與へき。われはあまりの
嬉しさに、けふの恐ろしかりし事共、はや悉く
忘れ果てたり。されど此事を得忘れ給はざるは、
始終の事を聞き給ひし母上なりき。フエデリゴ
はこれより後、我を伴ひて出づることを許され
ざりき。フラア・マルチノもいふやう。かの時
二人の命の助かりしは、全く聖母のおほん恵に
て、邪宗のフエデリゴが手には授け給はざる絲
を、善く神に仕ふる、やさしき子の手には與へ
給ひしなり。されば聖母の恩をば、身を終ふる
まで、ゆめ忘るゝこと勿れといひき。

フラア・マルチノがこの詞と、或る知人の
戯に、アントニオはあやしき子なるかな、う
みの母をば愛するやうなれど、外の女をばこと
ごとく嫌ふと見ゆれば、あれをば、人となりて
後僧にこそすべきなれ、といひしことあるとに

よりて、母上はわれに出家せしめむとおもひ給ひき。まことに我は奈何なる故とも知らねど、女といふ女は側に來らるゝだに厭はしう覺えき。母上のところに來る婦人は、人の妻ともいはず、處女ともいはず、我が穢き詞にて、このあやしき好憎の心を語るを聞きて、いとおもしろき事におもひ做し、強ひて我に接吻せむとしたり。就中マリウチアといふ娘は、この戯にて我を泣かすること屢なりき。マリウチアは活潑なる少女なりき。農家の子なれど、裁縫店にて雛形娘をつとむるゆゑ、華麗やかなる色の衣をよそひて、幅廣き白き麻布もて髪を巻けり。この少女フエデリゴが畫の雛形をもつとめ、又母上のところにも遊びに來て、その度ごとに自らわがいひなづけの妻なりといひ、我を小き夫なりといひて、迫りて接吻せむとしたり。われ諾はねば、この少女しばし武を用ゐき。或る日われまた脅されて泣き出しに、さては猶釋兒なりけり、乳房啣ませずては、啼き止むまじ、とて我を掻き抱かむとす。われ慌て、逃ぐるを、少女はすかさず追ひすがりて、兩膝にて我身をしかと挟み、いやがりて振り向かむとする頭を、やう／＼胸の方へ引き寄せたり。われは少女が挿したる銀の矢を抜きたるに、豐なる髪は波打ちて、我身をも、露れたる少女が肩をも掩はむとす。母上は室の隅に立ちて、笑みつゝマリウチアがなすわざを勧め勵まし給へり。この時フエデリゴは戸の片蔭にかくれて、竊に此群をゑがきぬ。われは母上にいふやう。われは生涯妻

といふものをば持たざるべし。われはフラア・マルチノの君のやうなる僧とこそならめといひき。

夕ごとにわが怪しく何の詞もなく坐したるを、母上は出家せしむるにたよりよき性なりとおもひ給ひき。われはかかる時、いつも人となりたる後、金あまた得たりむには、いかなる寺、いかなる城をか建つべき、寺の主、城の主となりなん日は、「カルヂナアレ」の僧の如く、赤き衷甸に乗りて、金色に装ひたる僕あまた隨へ、そこより出入せんとおもひき。或るときは又フラア・マルチノに聞きたる、種々なる獻身者の話によそへて、おのれ獻身者とならむをりのおもひ、世の人いかにおのれを責むとも、おのれは聖母のめぐみにて、つゆばかりも苦痛を覺えざるべしとおもひき。殊に願はしく覺えしは、フエデリゴが故郷にたづねゆきて、かしこなる邪宗の人々をまことの道に歸依せしむる事なりき。

母上のいかにフラア・マルチノと謀り給ひて、その日とはなりけむ。そはわれ知らでありしに、或る朝母上は、我に小き衣を着せ、其上に白衣を打掛け給ひぬ。此白衣は膝のあたりまで届きて、寺に仕ふる兒の着るものに同じかりき。母上はかく爲立て、我を鏡に向はせ給ひき。我は此日より尖帽宗の寺にゆきてちごとなり、火伴の童達と共に、おほいなる帛香爐を提げて儀にあづかり、また贊卓の前に出で、讚美歌をうたひき。總ての指圖をばフラア・マルチノなし

つ。われは幾程もあらぬに、小き寺のうちに住み馴れて、贊卓に畫きたる神の使の童の顔を悉く記え、柱の上なるうねりたる模様を識り、瞋目したるときも、醜き龍と戰ひたる、美しき聖ミケルを面前に見ることを得るやうになり、鋪床に刻みたる髑髏の、綠なる葛かづらにて編みたる環を戴けるを見てはさまざまの怪しき思をなしき。(聖ミケルが大なる翼ある美少年の姿にて、惡鬼の頭を踏みつけ、鎗をその上加へたるは、名高き畫なり。)

美小鬟、即興詩人

萬聖祭には衆人と俱に骨甕にありき。こはフラア・マルチノの嘗て我を伴ひて入りにしところなり。僧どもは皆經を誦するに、我は火伴の童二人と共に、髑髏の贊卓の前に立ちて、提香爐を振り動したり。骨もて作りたる燭臺に、けふは火を點したり。僧侶の遺骨の手足全きは、けふ額に新しき花の環を戴きて、手に露けき花の一束を取りたり。この祭にも、いつもの如く、人あまた集ひ來ぬ。歌ふ僧の「ミゼレエレ」(ミゼレエレ、メイ、ドミネ)、主よ、我を慰み給へ、と唱へ出す加特力教の歌をいふ)唱へはじむるとき、人々は膝を屈めて拜したり。髑髏の色白みたる、髑髏と我との間に渦巻ける香の煙の怪しげなる形に見ゆるなどを、我は久しく打ち目守り居たりしに、こはいかに、我身の周圍の物、皆獨樂の如くに廻り出しつ。物を見

るに、すべて大なる虹を隔て、望むが如し。耳には寺の鐘百ばかりも、一時に鳴るらむやうなる音聞ゆ。我心は早き流を舟にて下る如くにて、譬へむやうなく目出たかりき。これより後の事は知らず。我は氣を喪ひき。人あまた集ひて、鬱陶しくなりたるに、我空想の燃え上りたるや、この眩暈のもとになりけむ。醒めたるときは、寺の園なる檸檬の木の下にて、フラア・マルチノが膝に抱かれ居たり。

わが夢の裡に見きといふ、首尾整はざる事を、フラア・マルチノを始として、僧ども皆神の業なりといひき。聖のみたまは面前を飛び過ぎ給ひしかど、はるかなき童のそのひかり耀けるさまに堪へで、卒倒したるならむといひき。これより後、われは怪しき夢をみることに類なりき。そを母上に語れば、母上は又友なる女どもに傳へ給ひき。そが中には、われまことにさる夢を見しにはあらねど、見きと詐りて語りしもありき。これによりて、我を神のおん子なりとする、人々の惑は、日にけに深くなりまさりぬ。

さる程に嬉しき聖誕祭は近づきぬ。つねは山住ひする牧者の笛ふき（ピツフエラリ）となりたるが、短き外套着て、紐あまた下げ、尖りたる帽を戴き、聖母の像ある家ごとに音信來て、救世主の誕れ給ひしは今ぞ、と笛の音に知らせありきぬ。この單調にして悲しげなる聲を聞き、我は朝な夕な覺むるが常となりぬ。覺むれば説教の稽古す。おほよそ聖誕日と新年との間には、「サンタ、マリア、アラチエリ」の寺な

る基督の像のみまへにて、童男童女の説教あること、年ごとの例なるが、我はこし其一人に當りたるなり。

吾齡は甫めて九つなるに、かしこにて説教せむこと、いとめでたき事なりとて、歡びあふは、母上、マリウチア、我の三人のみかは。わがありあふ卓の上に登りて、一たびさらへ聞かせたるを聞きし、畫工フエドリゴもこよなうめでたがりぬ。さて其日になりければ、寺のうちに卓の上に押しあげられぬ。我家のとは違ひて、この卓には毯を被ひたり。われはよその子供の如く、語じたるまゝの説教をなしき。聖母の心より血汐出でたる、釋き基督のめでたきなど、説教のたねなりき。我順番になりて、衆人に仰ぎ見られしとき、我胸跳りしは、恐ろしさゆゑにはあらで、喜ばしさのためなりき。これ迄の小兒の中に、尤も人々の氣に入りしもの、即ち我なること疑なかりき。さるをわが後に、卓の上に立たせられたるは、小き女の子なるが、その言ふべからず優しき姿、驚くべきまでしほらしき顔つき、調清き樂に似たる聲音に、人々これぞ神のみつかひなるべき、とささやきぬ。母上は、我子に優る子はあらじ、といはまほしう思ひ給ひけむが、これさへ聲高く、あの女の子の贊卓に畫ける神のみつかひに似たることよとのたまひき。母上は我に向ひて、かの女子の怪しく濃き目の色、鴉青いろの髪、をさなくて又伶俐げなる顔、美しき紅葉のやうなる手などを、繰りかへして譽め給ふに、わが心には妬ま

しきやうなる情起りぬ。母上は我上をも神のみつかひに譬へ給ひしかども。

鶯の歌あり。まだ巢ごもり居て、薔薇の枝の緑の葉を啄めども、今生ぜむとする蕾をば見ざりき。二月三月の後、薔薇の花は開きぬ。今は鶯これにのみ鳴きて聞かせ、つひには刺の間に飛び入りて、血を流して死にき。われ人となりて後、しばし此歌の事をおもひき。されど「アラチエリ」の寺にては、我耳も未だこれを知らず、我心も未だこれを會せざりき。

母上、マリウチア、その外女どもあまたの前にて、寺にてせし説教をくりかへすこと、しばしばありき。わが自ら喜ぶ心はこれにて慰められき。されど我が未だ語り厭かぬ間に、かれ等は早く聴き倦みき。われは聴衆を失はじの心より、自ら新しき説教一段を作りき。その詞は、まことの聖誕日の説教といはむよりは、寺の祭を敍したるものといふべき詞なりき。そを最初に聞きしはフエドリゴなるが、かれは打ち笑ひ乍らも、そちが説教は、兎も角もフラア・マルチノが教へしよりは善し、そちが身には詩人や舍れる、といひき。フラア・マルチノより善しといへる詞は、わがためにいと喜ばしく、さて詩人とはいかなるものならむとおもひ煩ひ、おそらくは我身の内に舍れる善き神のみつかひならむと判じ、又夢のうちに我に面白きものを見するものにやと疑ひぬ。

母上は家を離れて遠く出で給ふこと稀なりき。されば或日の晝すぎ、トラスステエエル（デエエ

ル河の右岸なる羅馬の市區なる友だちを訪はむ、とのたまひしは、我がためには祭に往くごとくなりき。日曜に着る衣をきよそひぬ。中單の代にその頃着る習なりし絹の胸當をば、針にて上衣の下に縫ひ留めき。領巾をば幅廣き襷に摺みたり。頭には縫とりしたる帽を戴きつ。我妻はいとやさしかりき。

とぶらひ畢りて、家路に向ふころは、はや頗る遅くなりたれど、月影さやけく、空の色青く、風いと心地好かりき。路に近き丘の上には、「チブレツソオ」、「ピニヨロ」などの常磐樹立てるが、怪しげなる輪廓を、鋭く空に畫きたり。人の世にあるや、とある夕、何事もあらざりしを、久しくえ忘れぬやうに、美しう思ふことあるものなるが、かの歸路の景色、また然る類なりき。國を去りての後も、テエルの流のさまを思ふごとに、かの夕の景色のみぞ心には浮ぶなる。黄なる河水のいと濃げに見ゆるに、月の光はさしたり。礮穀車の鳴り響く水の上に、朽ち果てたる橋柱、黒き影を印して立てり。この景色心に浮べば、あの折の心輕げなる少女さへ、扁鼓手に抱りて、「サルタレロ」舞ひつゝ過ぐらむ心地す。「サルタレロ」の事をば聊注すべし。こは單調なる曲につれて踊り舞ふ羅馬の民の技藝なり。一人にて踊ることあり。又二人にても舞へど、その身の相觸るゝことはなし。大抵男子二人、若くは女子二人なるが、跳ねる如き早足にて半圓に動き、その間手を休むることなく、羅馬人に産れ付きたる、

しなやかなる振をなせり。女子は裳裾を塞ぐ。鼓をば自ら打ち、又人にも打たす。其調の變化といふは、唯速速のみなり。サンタ、マリヤ、デルラ、ロツンダの街に來て見れば、こゝはまだいと賑はし。魚蠟の烟を風のまにまに吹き飛ばせて、前に木机を据ゑ、そが上に月桂の青枝をもて編みたる籠に貨物を載せたるを飾りたるは肉鬻ぐ男、果賣る女などなり。剝栗並べたる釜の下よりは、火鉢立昇りたり。買人の物いひかはす聲の高きは、伊太利ことば知らぬ旅人聞かば、命をも顧みざる争とやおもふらむ。魚賣る女の店の前にて、母上譚る人に逢ひ給ひむ。女子の間とて、物語長きに、店の蠟燭流れ盡むとしたり。さて連れ立ちに、其人の家の戸口までおくり行くに、街の上はいふもさらなり。「コルソオ」の大道さへ物寂しう見えぬ。されど美しき水盤を築きたるピアツツア、チ、トレネイに曲り出でしときは、又賑はしきさま前の如し。

こゝに古き殿づくりあり。意なく投げ疊ねたるやうに見ゆる、礎の間より、水流れ落ちて、月は恰も好し棟の上にぞ照りわたれる。河伯の像は、重き石衣を風に吹かせて、大なる漣を見おろしたり。漣のほとりには、喇叭吹くトリイトンの神二人海馬を馭したり。その下には、豊に水を湛へたる大水盤あり。盤を繞れる石級を見れば農夫どもあまた心地好げに月明の裡に臥したり。截り碎きたる西瓜より、紅の露滴りたるが其傍にあり。骨組太き童一人、身に着けた

るものとは、薄き汗衫一枚、鞆革の袴一つなるが、その袴さへ、控鈕脱れて膝のあたりに垂れかかりたるを、心ともせずや、「キタルラ」の絃、おもしうげに掻き鳴して坐したり。忽ちにして歌ふこと一句、忽にして又奏すること一節。農夫どもは掌打ち鳴しつ。母上は立ちとまり給ひぬ。この時童の歌ひたる歌こそは、いたく我心を動かすつれ。あはれ此歌よ。こは尋常の歌にあらず。この童の歌ふは、目前も見え、耳のほとりに聞ゆるが儘なりき。母上も我も亦曲中の人となりぬ。さるに其歌には韻脚あり、其調はいと妙なり。童の歌ひけるやう。青き空を衾として、白き石を枕としたる寢ごゝろの好さよ。かくて笛手二人の曲をこそ聞け。童は斯く歌ひて、「トリイトン」の石像を指したり。童の又歌ひけるやう。こゝに西瓜の血汐を酌める、百姓の一群は、皆戀人の上安かれと祈るなり。その戀人は今は寢て、聖ピエトロの寺の塔、その法皇の都にゆきし、人の上をも夢みらるむ。人々の戀人の上安かれと祈りて飲まむ。又世の中にあらむ限の、箭の手開かぬ少女が上をも、皆安かれと祈りて飲まむ。(箭の手開かぬ少女とは、髪に挿す箭をいへるにて、處女の箭には握りたる手あり、嫁きたる女の箭には開きたる手あり)かくて童は、母上の脇を抱りて、さて母御の上をも、又その童の鬢生ふるやうになりて、迎へむ少女の上をも、と歌ひぬ。母上善くぞ歌ひしと讃め給へば、農夫どもも、ジャコモが旨さよ、と手打ち鳴してさゝめきぬ。

この時ふと小き寺の石級の上を見しに、こゝには識人ひとりあり。それは鉛筆取りて、この月明の中なる群を、寫さむとしたる畫工フエドリゴなりき。歸途には畫工と母上と、かの歌うたひし童の上につきて、語り戯れき。その時畫工は、かの童を即興詩人とぞいひける。

フエドリゴの我にいふやう。アントニオ聞け。そなたも即興の詩を作れ。そなたは固より詩人なり。たゞ例の説教を韻語にして歌へ。これを聞きて、我初めて詩人といふことあきらかにさとり。まことに詩人とは、見るもの、聞くものにつけて、おもしろく歌ふ人にぞありける。げにこは面白き業なり。想ふにあながち難からむとは思はれず、「ギタルラ」一つだにあらまし。わが初の作の料になりしは、向ひなる枯肉鋪なりしこそ可笑しけれ。此家の貨物の排べ方は、旅人の目にさへ留まるやうなりければ、早くも我空想を襲ひしなり。月桂の枝美しく編みたる間には、おほいなる駝鳥の卵の如く、乾略の塊懸りたり。「オルガノ」の笛の如く、金紙巻きたる燭は並び立てり。柱のやうに立てたる腸づめの肉の上には、琥珀の如く光を放ちて、「ペルミジヤノ」の乾酪据わりたり。夕になれば、燭に火を點するほどに、其光は腸づめの肉と「プレシチウツトオ」(らんかん)との間に燃ゆる、聖母像前の紅玻璃燈と共に、この幻の境を照せり。我詩には、店の卓の上なる猫兒、店の女房と價を爭ひたる、若き「カツブチノ」僧さへ、残ることなく入りぬ。此詩をば、幾度か

心の内にて吟じ試みて、さてフエドリゴに歌ひて聞かせしに、フエドリゴめでたがりければ、つひに家の中に廣まり、又街を踰えて、向ひなるひものやの女房の耳にも入りぬ。女房聞きて、げに珍らしき詩なるかな、ダンテの神曲とはかゝるものか、とぞ稱へける。

これを手始めに、物として我詩に入らぬはなきやうになりぬ。我世は夢の世、空想の世となりぬ。寺にありて、僧の歌ふとき、提香爐を打ち振りても、街にありて、叫ぶ買人、轟く車の間に立ちても、聖母の像と靈水盛りたる瓶の下なる、小き臥床の中にありても、たゞ詩をおもふより外あらざりき。冬の夕暮、鍛冶の火高く燃えて、道ゆく百姓の立ち寄りて手を温むるとき、我は家の窓に坐して、これを見つゝ、時の過ぐるを知らず。かの鍛冶の火の中には、我空想の世の如き殊なる世ありとぞ覺えし。北山おろし劇しうして、白雪街を籠め、廣くうちの石の「トリイトン」に氷の鬚おふるときは、我喜限なかりき。憾むらくは、かゝる時の長からぬことよ。かゝる日には年ゆたかなる兆とて、羊の裘きたる農夫ども、手を拍ちて「トリイトン」のめぐりを踊りまはりき。噴き出づる水に雨は、晴れなんとする空にかゝれる虹の影映りて。

花祭

六月の事なりき。年ごとにジエンツアノにて

執行せらるゝ、名高き花祭の期は近づきぬ。(ジエンツアノはアルパノ山間の小都會なり。羅馬と沼澤との間なる街道に近し)。母上とも、マリウチアとも仲好き女房ありて、かしこなる料理屋の妻となりたり。(伊太利の小料理屋にて「オステリア、エエ、クチイナ」と招牌懸けたる類なるべし)。母上とマリウチアとが此祭にゆかむと約したるは、數年前よりの事なれども、いつも思ひ掛けぬ事に妨げられて、えも果さざりき。今年はずす約を履まむとなり。道遠ければ、祭の前日にいで立たむとす。かしまだちの前の夕には、喜ばしさの餘に、我眠の穩ならざりしも、理なるべし。

「エツツリノ」といふ車の門前に來しときは、日未だ昇らざりき。我等は直に車に上りぬ。是れより先には、われ未だ山に入りしことあらざりき。祭の事を思ひての喜に胸さわぎのみぞせられたる。身の邊なる自然と生活を、人となりの後、當時の情もて觀ましかば、我が作る詩こそ類なき妙品ならめ。街道の静けさ、鐵物の野邊に、物寂しき墳墓のところゝに立てる、遠山の裾を罩めたる濃き朝霧など、我がためにはこたび觀るべき、めでたき祕事の前兆の如くおもはれぬ。道の傍に十字架あり。そが上には枯骸殘れり。こは幸なき人を脅したる報に、こゝに刑せられし強人の骨なるべし。これさへ我心を動すことたゞならざりき。山中の水を羅馬の市に導くは、許多の算の數をば、はじめ